

手書きの時代 私が新入社員だったころ その5

■新編集講座 ウェブ版 第145号 2020/4/1

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

4月になりました。多くの企業で新入社員を迎えます。今年は新型コロナウイルスの感染拡大で、入社式縮小や中止という会社も多いですが、逆境に負けず、新人の皆さんがご活躍されることをお祈りしています。新編集講座では毎春、1981年に入社した私の新人時代=右欄参照=をご紹介します。今回も、初任地・宇都宮支局での記者生活を振り返ります。当時はワープロの普及前で、鉛筆で原稿を書いていた。

■ 1本だけ残った鉛筆

私の机には今も、丸い鉛筆が1本だけ残っています。「毎日新聞」の名と、星をかたどった旧社章が刻印された年代品です=図①。社章は1991年に変更されており（現在は星と目を組み合わせたデザイン）、この鉛筆が作られたのは30年ほど前と思われる。社内で見かけることもなくなりましたが、私はものもちがよかったです（最後の1本と思うともったいないので、もう使っていません）。

私が入社した80年代、原稿は手書きが当たり前でした。もちろん万年筆やボールペンを使うこともあったのですが、「厳寒などの際にインキが出ない」「インキ切れに気づかない（万年筆の場合）」「紙質によってはうまく書けない」という難点もあり、鉛筆の使い勝手は結構よかったです。本社から毎月届く鉛筆を箱ごと持ち帰り、毎朝何本か削って出勤するのが当時の日課でした。

■ ちぎっては投げ

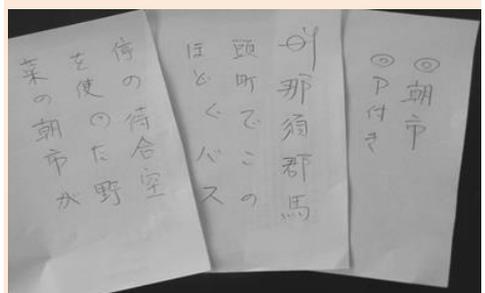
原稿を書くのには、ます目が入った紙（いわゆる原稿用紙）を使うこともありましたが、ザラ紙をB6サイズほどに裁断して束ねた「雑用紙」が主に用いられていました=写真②③。メモ帳のように片側を軽くのり付けしてあって、1枚書いてはめくり……という使い方をします。原稿以外にも、汚れた机をふいたり、仕事の後の小宴で乾きものを置くのに用いたり、万能選手の働き者でした。

当時は新聞1行の文字数が15～13字の時代。雑用紙は、1枚に1行見当（5字×3行=15字）の文字を書きました。この「1行単位で切り離せる」点が雑用紙の利点だったのです。出先の記者が電話で送ってきた原稿をデスクが点検すると、1枚（1行）ずつちぎっては入力担当者に渡し本社に送稿したり、別の記者に「ここ分りにくいから書き直して」と頼んだり、小回りがききました。1枚の紙に5～10行の原稿を書く原稿用紙よりも愛用された理由です。



■ 新人のころ

入社時の私。1981(昭和56)年撮影なので、39年がたちました。逆に、81年の39年前は42(同17)年。太平洋戦争勃発の翌年で、ミッドウェー海戦のあった年だと思うと、39年の長さを感じます。



(上)③雑用紙に鉛筆で書いた原稿の例

■ 盤面に無秩序に(?)並ぶ文字

今、さりげなく私は「電話で送ってきた原稿」や「入力担当者」と書きました。出先—支局—本社がスマホやパソコンで結ばれ、原稿も写真もオンラインでやり取りできる現代にあっては、これらの記述にも注釈が必要でしょう。

このうち、原稿の電話送稿には独特のコツや思わぬ失敗談もあり詳しくお話ししたいので、別の機会にまとめます。ここでは、支局の入力担当者についてご紹介しましょう。

当時、支局には入力機という大型端末=写真④=があり、パンチャーさん=右欄参照=が本社に送稿していました。拡大写真を見れば分かるように、盤面には漢字や数字、アルファベットが一見無秩序に並び、すいすい操作するパンチャーさんが神様に見えました(「南」と「北」、「年」と「月」と「日」が並び、規則性があるようですが、ついに分かりませんでした)。

■ 穴を開けた紙テープで送稿

入力機で原稿を打つと、穴を開けた細長い紙テープを出力します。穴の位置の順列組み合わせで文字を識別しており、入力機のことを鑽孔(さんこう)機とも呼びました。鑽はキリの意、孔は穴なので、文字通り「穴を開ける機械」です。

パンチャーさんに聞くと、頻出する語句(例えば「宇都宮中央署の調べによると」のような定型句)は、穴の開いたテープを見ただけで読めるそうで、常人を超越した能力に感じました。

入力機では、この「穴の位置情報」を読み取って本社に電信で送信。本社で文字に復元したのです。本社では、紙テープを活字鑄造機にかけ、元の原稿通り、自動的に鉛の活字を鑄込んでいました。コンピューター編集登場前の話です。

■ まだワープロは普及せず

さて、このように(今から見れば信じられない)苦勞をして原稿を手書きし、専門の担当者が入力と送信をしていたのは、端的に言ってワープロが普及していなかったからです。

本社のデータベースで、「ワードプロセッサ」という単語を含み、私が入社する1981年以前に掲載された記事を検索すると、80年の科学面記事1件だけでした=図⑤=。

この記事を読むと、文章の編集や印刷、あるいは遠隔地への送信ができるなど、ワープロの機能を具体的に説明しています。裏返せば、存在が世間に知られていなかったということでしょう。何より、「ワープロ」という略称が登場せず、見出しも「ワードプロセッサ」が使われています。

まさに隔世の感がありますが、実は東芝が手がけた日本で初めてのワープロ=写真⑥=の開発には、毎日新聞の技術陣が関わっていました。項を改めて、その話をご紹介します。



(右)④大阪本社の見学者コーナーに保存されている入力機と、拡大写真(⑥)紙テープ部、(⑤)盤面)



パンチャーさん

支局に配置されたパンチャーは、地元採用の若い女性が多かったようです。上司や先輩に叱られた若手記者(当時は大半が男性)を励ますこともあり、各地でカップルが誕生しました。ただ、特ダネの金一封など社内事情は筒抜け。「困ることもある」とこぼす先輩もいました。

オフィスでの文書への新兵器として、日本語ワードプロセッサが注目されてきた。日本語ワードプロセッサとは、漢字かな混じり文書の作成編集機能、和文タイプに文意網羅機能、印刷能力を加味したような仕事ができる。今年登場したものは、文章を遠隔地に伝送する能力をプラスしたのもある。このように日本語ワードプロセッサは、一台でタイプ・編集・印刷・伝送の、四位一体の機能が集まる機械だ。だから、日本語ワードプロセッサがオフィス・オートメーションの進展として次々と登場してきているのである。

日本語ワードプロセッサ



⑤1980年12月8日 朝刊科学面



(上)⑥川崎の「東芝未来科学館」に保存されている日本初のワープロ。ほとんど「机」です